# シティズンシップを育てる「子ども新聞づくり」の挑戦

## － 専門家グループと小学校との協働の試み（2 年次）－

中善則（花園大学）、伊東広路（読売新聞大阪本社）、徳永加代（帝塚山大学）、今宮信吾（桃山学院教育大学）西村まさみ（京丹後市学校図書支援ボランティア）、角野綾子（JAE）

### １　はじめに

### （１）　本専門家グループの構成員と活動目標

本専門家グループ（以下、本グループ）の活動目標は、大阪の子どもたちが地域住民や専門家とともに活動し、自ら意見を発信、社会づくりに参画する手段として「子どもメディア基地」（子どもが運営する新聞社・ラジオ局・テレビ局等）を常設することである。

構成メンバーは、NIE に関心を持つ、社会科教育（中）・情報活用能力（徳永）・作文教育（今宮）の研究者、協同学習のコーディネーター（角野）、司書教諭・公民館長（西村）、ＮＩＥに携わる新聞社員（伊東）である。私たちの信念は「民主主義社会を発展させるため、大人は、子どもにメディアを持つ機会を創設する責務がある」ということであり、子どもたちに対し、それぞれの専門性を活かし、街の話題や課題を調査・取材・研究し、議論のうえ作成する“本格的な新聞づくり”を支えたいと考えている。作成可能なメディアは多様だが、紙媒体の「新聞」は小中学生にとっては、繰り返し読むことが可能で、編集や配布も容易であることから、当面は新聞形式に特化して研究を進める計画である。

### （２）本グループの研究活動と研究方法について

私たちは①の信念のもと、2018 年度より研究活動を開始した。研究の初年度は、ある小学校で有志児童を公募し、その学校の先生方の協力も受けながら、本グループが指導者となって新聞を作るという形態をとった。その取り組みは、第 16 回日本 NIE 学会鳴門大会等ですでに発表し、その成果と課題を明らかにしている[1)]。以下、その内容を 2 点、簡潔にまとめておく。①新聞が完成し、児童のシティズンシップの向上に一定の成果があったこと。②活動の「形態」と「質」に関して課題が明らかになったこと。つまり、活動の形態」に関しては、この形態は、運営面で予想以上に諸々な困難な点があること。「活動の質」に関しては、完成新聞が、（たとえ小学生としてはよくできていても）いわゆる本来のジャーナリズム精神に基づく「新聞」というものに値するものまでの高め方が難しかったこと、児童が新聞の配達などをして住民等と交信し、街のありかたを考えるといった「市民」としての活動の場の創出がうまくできなかったことである。

そこで、２年次（2019 年度）は、教育課程内の総合学習の時間で、学年全児童対象に、学校の先生方主体（本グループはその支援）で新聞づくりを行うことにし、両年度での２パターンの実践の長短所や派生する課題を整理、３年次以降の子どもメディアづくりの将来構想を考えていくことにした。

本発表は、このような経過と構想を持つ 2019 年度の実践報告となる。まず、実践概要と成果物や貸し出し図書資料、児童アンケート等のデータを示し、それぞれの専門的見地から分析、成果と課題を記す。その際、本研究で育成する力として、表１に示した５つの視点、23 項目の指標を設定した。その中で①～⑯をシティズンシップの指標、⑰～㉓を情報活用能力の指標とし、この指標を選択式アンケート項目にして、事前から事後への変容を分析することにした。おしまいに、２年間の実践を踏まえ、本グループの今後の展望を記す。

表１　本研究で育成する力

シティズンシップの指標

「A 自分について」

①自分の思いや考えを伝えることができる。

②むずかしいことがあってもあきらめず、ねばり強く取り組むことができる。

③困ったことを解決したり、目標(めあて)を達成するための方法を、自分なりに考えることができる。

「B 相手との関わり、グループ活動について」

④相手の意見を、まずは否定せずに受け止めることができる。

⑤自分の意見を伝えるとき、「相手にわかりやすいよう」工夫して伝えることができる。

⑥自分の意見を伝えるとき、「なぜそう思うか」といった理由も伝えることができる。

⑦自分の意見を伝えるとき、「どんな資料（本、新聞、インターネットなど）を調べてどんなことがわかったのか（または、だれに聞いてそう思ったのか)」を伝えることができる。

⑧考えたり調べたりしたことを新聞などにまとめるとき、「相手にわかりやすいよう」工夫してまとめることができる。

⑨色々な考えをもつ仲間と話し合い、目標(めあて)に向かって力を合わせることができる。

⑩相手にわかりやすいよう工夫して、自分やチームの意見を発表することができる。

「C 夢・目標・将来について」

⑪自分なりの夢や目標(こんなふうになりたい、こんなことができるようになりたい等)をもっている。

⑫将来のために、様々なことを知ったり学んだりしたいと思う。

「D まち・地域について」

⑬地域の人と話したり交流したりすることがある。

⑭自分達のために熱心に関わってくれる地域の大人がいる。

⑮まち・地域をよりよくするために、何をすべきか（どんなことをしたらいいか）考えることがある。

⑯自分自身が行動したり働きかけたりすることで、まち・地域をより良くすることができると思う。

情報活用能力の指標

「E 読み・書き・情報を集めることなどについて」

⑰知りたい・調べたいと思うことについて、「本」で調べて、情報を集めることができる。

⑱知りたい・調べたいと思うことについて、「新聞」で調べて、情報を集めることができる。

⑲知りたい・調べたいと思うことについて、「インターネット」で調べて、情報を集めることができる。

⑳知りたい・調べたいと思うことについて、「そのことを詳しく知っている専門家」にインタビューして、情報を集めることができる。

㉑調べたことや考えたことを、伝える相手にわかりやすいように文章などにまとめることができる。

㉒社会をよりよくするために、新聞は役立つと思う。

㉓地域（まち）や社会をよりよくするために、これからも新聞づくりに取り組みたいと思う。

## ２　２年次（2019 年度）の概要と完成新聞

### （１）2019 年度の取り組み態勢（2018 年度との比較も交えて）

2018 年度は教育課程外の取組み（放課後や土曜日などに実施した取組み）として、有志児童（小学４・５年生）15 名を対象に行った。本グループメンバーが専門家としてプログラムの企画から実施にすべてのプロセスに中心的に関わり、実施校の教員は今後の授業に活かすという希望から、取り組みの様子を見学したり、グループワークの一部を見守り支援するような形での関わり方だった。

逆に、2019 年度は教育課程内の取組みとして、小学５年生４クラス（116 名）を対象として行った。本グループより実施校にあらかじめ 2018 年度に実施したプログラム資料を提供し、実施校教員がそれを参考にしながらカリキュラムを組む形で実施した。また、カリキュラムの一部に、教員から本グループメンバーに専門家としての協力の依頼があり、その要請にこたえる形で本グループメンバーが参画した。

### （２）2019 年度プログラムの実践概要

2019 年度の実践経過を表３にまとめた。以下に、簡潔に取り組みの要点を記す。初回の授業には大阪管区気象台から講師を迎え、地震・防災についての基礎知識をおさえた。2 回目の授業では、角野が講師となって、各クラス 7 班に編成し、協同学習の重要なポイントを伝え、これからの取り組みの基盤となる協同学習の練習を行うとともに、各児童の地震の経験を共有する時間をとった。3 回目の授業では、伊東が講師となって、新聞づくりの

表２　2018 年度と 2019 年度の態勢比較表

| | 2018 年度<br>大阪府 A 市立 B 小学校 | 2019 年度<br>大阪府 A 市立 C 小学校 |
|---|---|---|
| 取組みの位置づけ | 教育課程**外**（放課後や土曜日） | 教育課程**内**（総合的な学習等） |
| プログラム実施主体 | 専門家（本グループ） | 教職員 |
| 専門家の関わり | 企画、プログラム進行、支援・助言 | プログラムの一部を担当、支援・助言（新聞づくりの要点説明・アドバイス、図書を活用した活動支援、協同学習支援等） |
| 参加児童 | 小学 4・5 年生　15 名（有志） | 小学 5 年生 116 名 |

プロセスや大事なポイントを伝えた。4 回目の授業では、徳永、西村が講師となって調べ学習の進め方を伝え、アドバイスを行った。その後、児童は調べ学習を進め、取材内容を考えた上で、7 回目には高槻市学校安全課と危機管理室の職員を迎え、防災や安全を守る方法等について学んだ。続いて具体的な新聞づくりにあたって、中と西村から要点を伝え、助言をして、各班の新聞づくりをサポートした。結果、期日までに、全 28 班が新聞を完成させた。その新聞は、地域の防災訓練の日に、児童がプレゼンを行い発表した。発表本番は、拡大コピーした新聞を体育館に掲示し、自分たちのつくった新聞の前に児童が立って、保護者や専門家（本グループのメンバー）にプレゼンを行った。児童は新聞の内容についての説明のみならず、工夫した点や、新聞に込めた思いなどに言及している班も見られた。また、救命方法や防災グッズの使い方等について実演を披露したり、オリジナルの差し棒をつくったりした班もあり、それぞれに工夫や熱意が感じられた。プレゼンを聞いた後は、児童との質疑応答や、フィードバックを行った。また、会場では来場者用にコメント用紙を準備。プレゼン直後に伝えきれなかったフィードバックを残すことができるように対応した。児童のつくった新聞は体育館にそのまま掲示し、後日の防災訓練でも読めるようにした。防災訓練で体育館を訪れた地域住民は、各新聞を読み、コメント用紙で児童にフィードバックを残した。以上、児童は最終成果物である新聞を通じ、地域住民に防災について伝える工夫を行った。新聞を見た地域住民からは、コメント用紙を通じて、児童へのフィードバックを得られた。

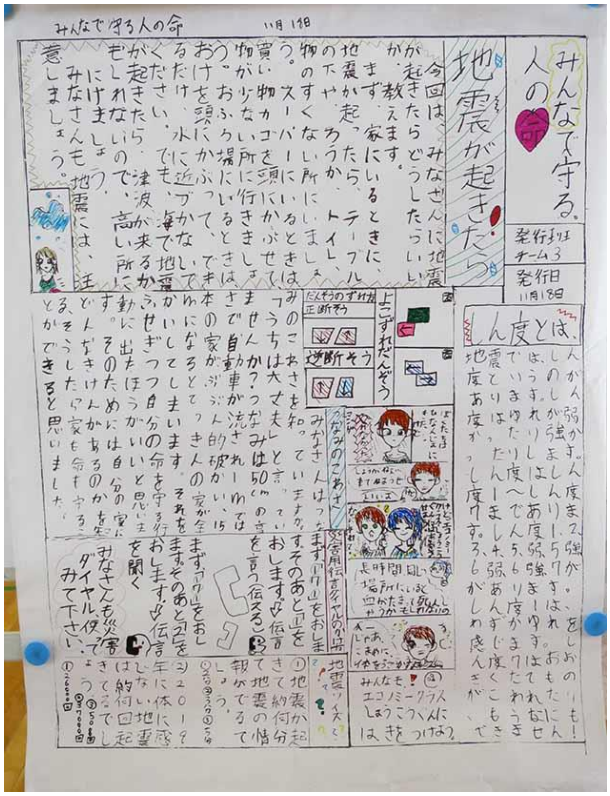
表 3　2019 年度の実践経過

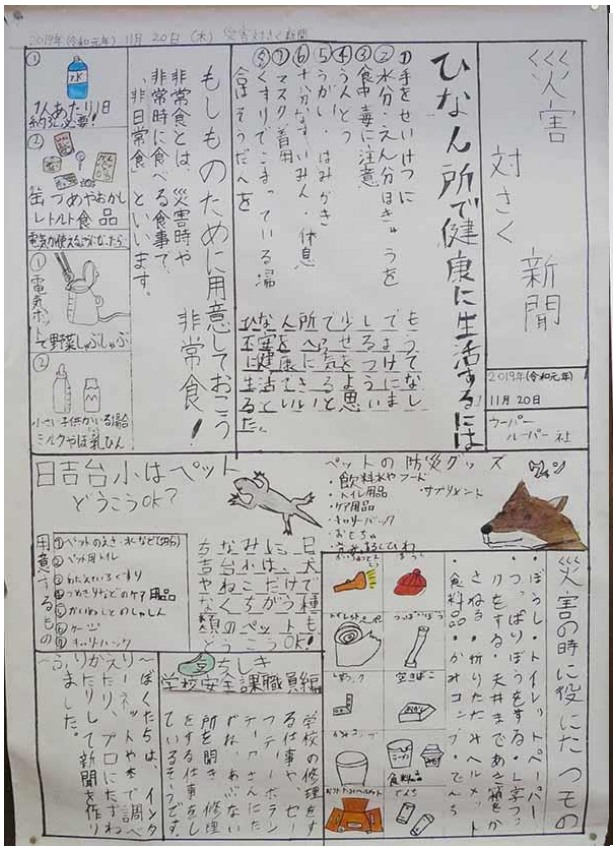
| 実施日時 | 目標 | 内容 | 協力者 |
|---|---|---|---|
| ①10/17<br>1 時限 | 地震・防災について知る | 大阪管区気象台からゲスト講師を迎え、地震・防災について学ぶ | 大阪管区気象台 |
| ②10/18<br>1 時限 | ・目標や流れを知ろう<br>・チームビルディング<br>・地震の経験を共有しよう | １．目標・流れを知る、アイスブレイク<br>２．チームワークの練習（ブレーンストーミング）<br>３．地震の経験を共有する<br>（４．新聞のテーマを考える）→時間がなかったため翌日以降に持ち越し | 角野 |
| ★新聞のテーマを考える | | | |
| ③10/23<br>1 時限 | 新聞づくりの大事なポイントを学ぼう | 新聞づくりのプロセスや大事なポイントを学ぶ（ターゲットや構成など） | 伊東 |
| ④10/28 | 資料を使って調べ | ・調べ学習の進め方を学ぶ | 西村・徳永加代 |

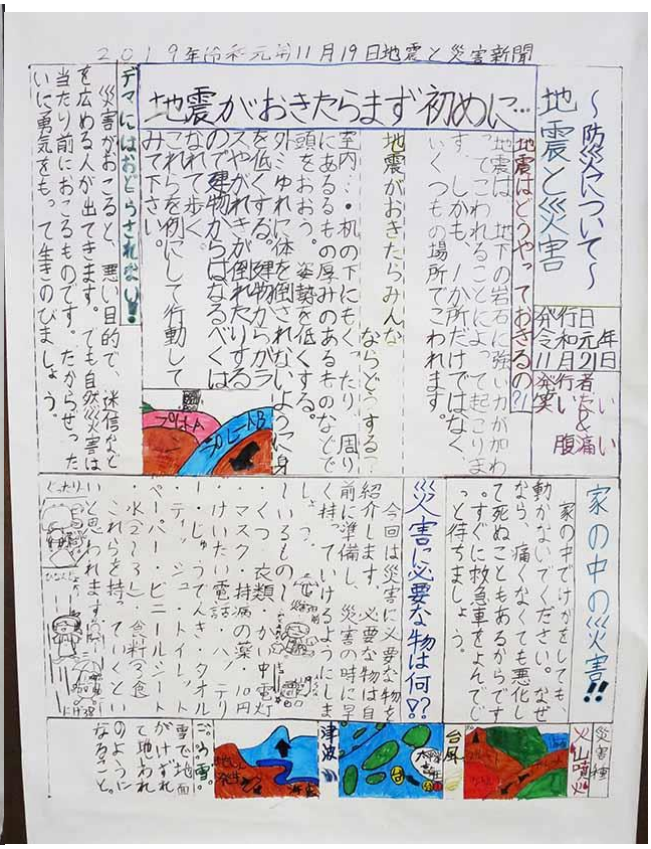
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1時限 | よう | ・調べ学習 | |
| ⑤10/30<br>1時限 | 資料を使って調べよう | ・調べ学習 | ― |
| ⑥11/1 | 取材の準備をしよう | 1．取材内容を考える<br>2．取材のときの役割分担を考える | ― |
| ⑦11/5 | 取材をしよう | 高槻市学校安全課、危機管理室に取材を行う | 高槻市学校安全課、危機管理室 |
| ⑧11/7<br>1時限 | ・新聞の書き方を学ぼう<br>・チームで新聞をまとめよう | 1．新聞の書き方（見出しや記事構成、写真・図の効果的な使い方等）を学ぼう<br>2．グループワーク（新聞をまとめよう） | 中、西村 |
| ⑨11/12 | チームで新聞をまとめよう | チームで新聞をまとめる<br>全28班　新聞完成 | 西村、徳永祥子 |
| ⑩11/14 | | | 徳永祥子(応援) |
| ⑪11/18 | 発表の準備をしよう | チームで発表の準備をする | ― |
| ⑫11/20 | 発表の練習をしよう | チームで発表のリハーサルをする | ― |
| ⑬11/21 | つくった新聞を発表しよう（体育館保護者等参加） | 1．新聞をプレゼンしよう<br>2．講評 | 中、伊東、今宮、徳永祥子（応援)、西村、角野 |

（3）　完成新聞と図書の貸し出し資料や児童のアンケート結果等各種資料

(ア)完成28新聞のうち、主なもの


みんなで守る人の命
11月18日
みんなで守る人の命
地震が起きたら!
発行日 11月18日
地震とは、
地震のはれの日
台風について
防災カード
防災カードは、たった1枚ですが、災害時に必要なことがまとまってかかれています。
防災カード
非常持出品
編集後記


2019年(令和元年)11月20日(木) 災害対さく新聞
災害対さく
ひなん所で健康に生活するには
2019年(令和元年)11月20日
ウーパー ルーパー社
もしものために用意しておこう非常食!
日吉台小はペット どうこうOK?
ペットの防災グッズ
災害の時に役にたつもの


2019年(令和元年)11月19日地震と災害新聞
地震がおきたらまず初めに…
デマにはおどらされない!
地震とは どうやっておきるの?
地震と災害
~防災について~
家の中の災害!!
災害に必要な物は何?

(イ)完成新聞の主たる記事の見出し

| 内容 | | 主な見出し |
|---|---|---|
| 地震 | 基礎知識 | 日本に地震が多い理由、地震が起きる回数、つなみのおき方、しん度とは、つなみのこわさ、過去の災害、地震がおこるしくみ、土しゃ災害　前ちょう、30年以内に100％地震がくる、地震のゆれの様子 |
| | | 被災者の話、地震から学んだ人々<br>地震だ！！どうする？、地震が起きたら、地震の時の安全な場所 |
| | 南海トラフ | 南海トラフプレートの説明、南海トラフに備え、南海トラフについて、 |
| 台風 | | 台風の被害、台風について |
| 備え | 行動 | 自分で命を守る　危険の予測をしよう、安全な行動、命を守るためには、家の中の危険、災害用伝言ダイヤルのかけ方 |
| | 避難所 | ひなん所を知ろう、ひなん所で健康に生活するには、 |
| | 非常用 | 食料や非常用の道具を準備しておこう、にげるときの必要なもの、みんな知ってる？ひなんぐっつ、身近な物が大事な物に、これだけは用意しておきたいもの、もしものために用意しておこう　非常食！、　災害に役立ったもの、防災グッズ、<br>安全のための備蓄、非常持出品、こどものリュックに入れておく物、 |
| | カード | 防災カード、 |
| ボランティア | | ボランティア |
| 地域 | | 高槻の防災、有馬高槻断層帯の危険、高槻市危機管理室の方に質問しました |
| 内容 | | 主な見出し |
| 地震 | 基礎知識 | 日本に地震が多い理由、地震が起きる回数、つなみのおき方、しん度とは、つなみのこわさ、過去の災害、地震がおこるしくみ、土しゃ災害　前ちょう、30年以内に100％地震がくる、地震のゆれの様子 |
| | | 被災者の話、地震から学んだ人々<br>地震だ！！どうする？、地震が起きたら、地震の時の安全な場所 |
| | 南海トラフ | 南海トラフプレートの説明、南海トラフに備え、南海トラフについて、 |
| 台風 | | 台風の被害、台風について |
| 備え | 行動 | 自分で命を守る　危険の予測をしよう、安全な行動、命を守るためには、家の中の危険、災害用伝言ダイヤルのかけ方 |
| | 避難所 | ひなん所を知ろう、ひなん所で健康に生活するには、 |
| | 非常用 | 食料や非常用の道具を準備しておこう、にげるときの必要なもの、みんな知ってる？ひなんぐっつ、身近な物が大事な物に、これだけは用意しておきたいもの、もしものために用意しておこう　非常食！、　災害に役立ったもの、防災グッズ、<br>安全のための備蓄、非常持出品、こどものリュックに入れておく物、 |
| | カード | 防災カード、 |
| ボランティア | | ボランティア |
| 地域 | | 高槻の防災、有馬高槻断層帯の危険、高槻市危機管理室の方に質問しました |

（ウ）　新聞づくりのために、準備した図書リスト

| №. | 図書名 | 回数(人) |
|---|---|---|
| 1 | ３，１１が教えてくれた防災の本１ | ⑦　回 |
| 2 | ３，１１が教えてくれた防災の本２ | ⑦　回 |
| 3 | ３，１１が教えてくれた防災の本３ | ⑦　回 |
| 4 | ３，１１が教えてくれた防災の本４ | ⑦　回 |
| 5 | 巨大地震なぜ起こる？そのときどうする？ | ⑤　回 |
| 6 | どこがあぶないのかな？危険予測シリーズ４ぼうさい | ⑤　回 |
| 7 | ７２時間生きぬくための１０１の方法 | ⑤　回 |
| 8 | 地震　いのちと未来を守る防災１ | ⑤　回 |
| 9 | 知ってそなえよう！地震と津波 | ④　回 |
| １０ | いのちと未来を守る防災１地震 | ④　回 |
| １１ | みんなの防災事典 | ④　回 |
| １２ | 知ってそなえよう！地震と津波 | ④　回 |
| １３ | 災害に負けない防災ハンドブック | ③　回 |
| １４ | 地震　いのちと未来を守る | ③　回 |
| １５ | ボジョレーといっしょに学ぶ　自然災害　地震の災害 | ③　回 |
| １６ | 防災・防犯シュミレーション | ③　回 |
| １７ | 地震イツモマニュアル | ③　回 |
| １８ | 日本災害写真・絵画集２　地震・津波 | ②　回 |
| １９ | 親子のための地震イツモノート | ②　回 |
| ２０ | 災害に負けない防災ハンドブック | ②　回 |
| ２１ | 新・みじかなくらしと地方行政　防災センター | ②　回 |
| ２２ | 自治体・事業者のための防災計画作成・運用ハンドブック | ①　回 |
| ２３ | 日本の地震地図決定版 | ①　回 |
| ２４ | 宮城県気仙沼発！　ファイト新聞 | ①　回 |
| ２５ | 自身・防災シュミレーション大地震その時ときどうする？ | ①　回 |
| ２６ | じしん・つなみどうするの？ | ①　回 |
| ２７ | 地震の夜にできること | ①　回 |
| ２８ | びちくでごはん | ①　回 |
| ２９ | みんなを守るいのちの授業 | ①　回 |
| ３０ | 知ろう・防ごう・自然災害 | ①　回 |
| ３１ | 震度７ | ①　回 |
| ３２ | 日本を守る安全のエキスパート２　自然災害をくいとめる | ①　回 |
| ３３ | 命を守る防災の知恵１国際レスキュー隊サニーさんが教えてくれたこと地震・津波はどうして起きるのか | ①　回 |
| ３４ | 巨大津波の記録　明治・昭和・平成 | ①　回 |
| | **貸出用紙に書いていなかった図書** | |
| ３５ | 闘う日本　東日本大震災１か月の記録 | |
| ３６ | 震度７新潟中越地震を忘れない | |
| ３７ | 大震災の理科知識Ｑ＆Ａ250 地震・津波・原発・放射線・停電・災害対策・永久保存版 | |
| ３８ | ボジョレーと一緒に学ぶ自然災害 | |
| ３９ | まげねっちゃつなみの被災地宮城県女川町の子どもたちが見つめたふるさとの１年 | |
| ４０ | ＮＨＫ学ぼうＢＯＵＳＡＩ　命を守る防災の知恵２被災者に学ぶそのときどう行動したか | |
| ４１ | みんなで防災アクション１国際レスキュー隊サニーさんが教えてくれたこと台風や地震から身を守ろう | |
| ４２ | 命を守る安全のエキスパート３消防と防災の未来をきずく | |
| ４３ | ボジョレーといっしょに学ぶ自然災害 | |
| ４４ | 新・みじかなくらしと地方行政写真でわかる小学生の社会見学３防災センター | |
| ４５ | 家族で学ぶ地震防災はじめの１歩 | |
| ４６ | 子どものための防災訓練ガイド１防災マップ・カルテ作り身近な危険をチェック！ | |
| ４７ | 子どものための防災訓練ガイド２避難と行動その時、いのちを守りきる！ | |
| ４８ | 子どものための防災訓練ガイド３防災キャンプみんなで体験 | |
| ４９ | 犯罪と地震から子どもの命を守る！(教育技術ＭＯＯＫ) | |

| | |
|---|---|
| ５０ | 12 歳からの被災者学 |
| ５１ | 命のバトン |
| ５２ | アニメ版釜石の奇跡 |
| ５３ | 津波 |
| ５４ | 復興の取り組みから学ぶ未来を３ |
| ５５ | 復興の取り組みから学ぶ未来を２ |
| ５６ | 復興の取り組みから学ぶ未来を１ |
| ５７ | 防災子どものための防災ＢＯＯＫ |
| ５８ | ゆず先生は忘れない |
| ５９ | 世界の災害の今を知る火と土の災害１ |
| ６０ | 地震なんでも質問箱 |
| ６１ | 新聞を作ってみよう！ |

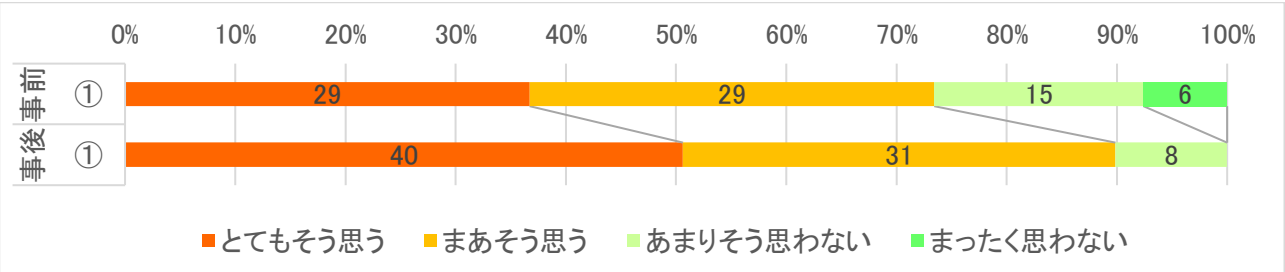
【備考】
＊児童に用意した図書数は複数のものを含めて、65 冊。
＊５年生全員が目を止めて、自由に手に取れるケースに入れ学年教室前の廊下に設置掲示した。
＊６５冊中３４冊延べ１００回(人)貸し出し用紙に記入して自分個人、若しくは、グループで活用させた。
＊貸出期間は特に設けず、また防災プロジェクト授業中にも自由に持ち出しは可能で活用していた。
＊貸し出し用紙に記入せず参考資料にした本も数多く、参考資料にしたグループもあったと想像できる。
＊貸し出しの３４冊は大別すると３種類に分類できる。

### （エ）　児童へのアンケート結果

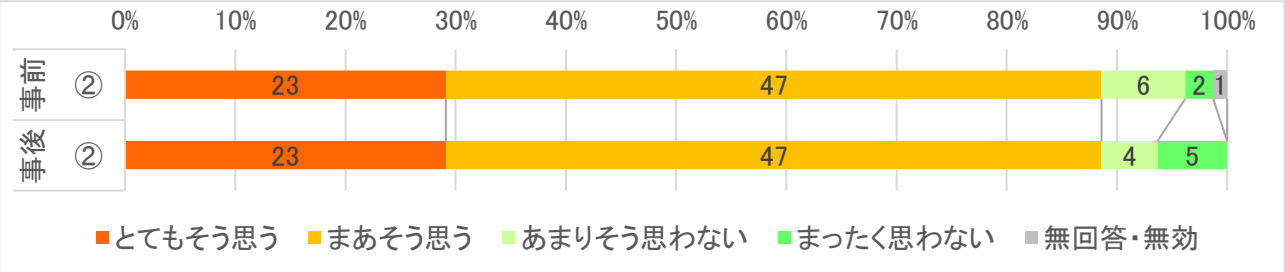
（児童 116 名中、事前・事後アンケート両方に回答した 79 名を対象にした結果である）

**◆Ｑ１．「自分」について**

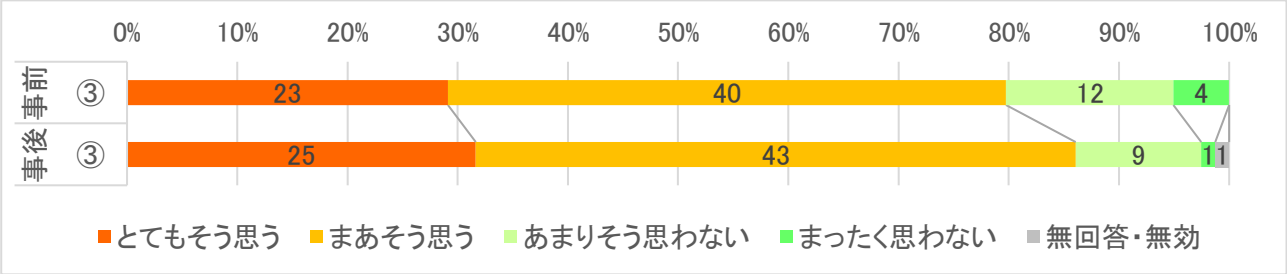
①自分の思いや考えを伝えることができる。



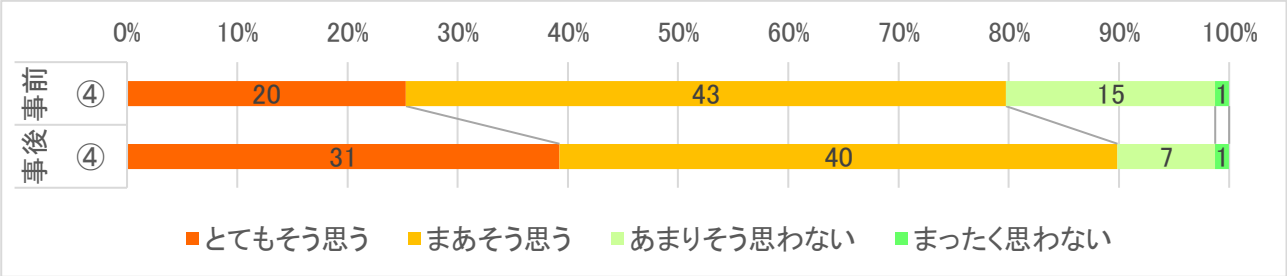

②むずかしいことがあってもあきらめず、ねばり強く取り組むことができる。



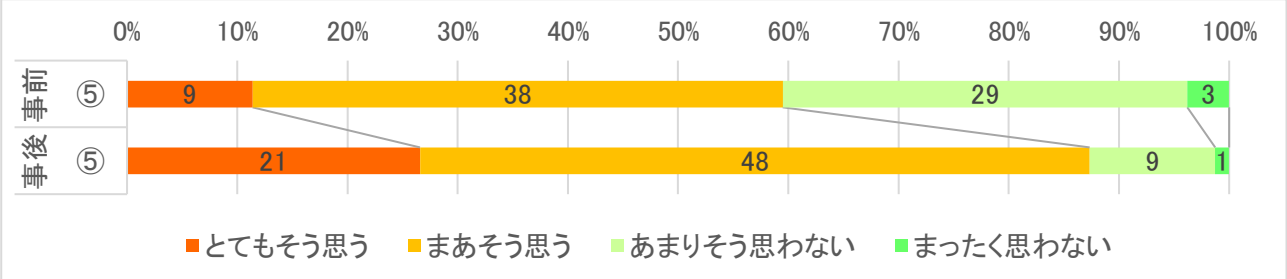
③困ったことを解決したり、目標(めあて)を達成するための方法を、自分なりに考えることができる。



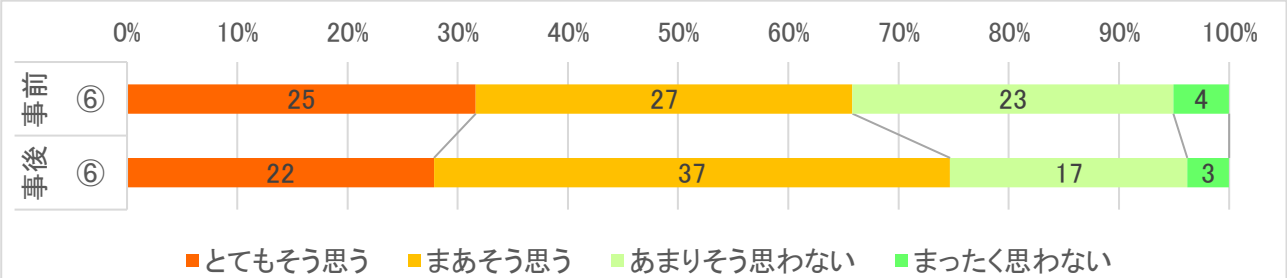

④相手の意見を、まずは否定(ひてい)せずに受け止めることができる。



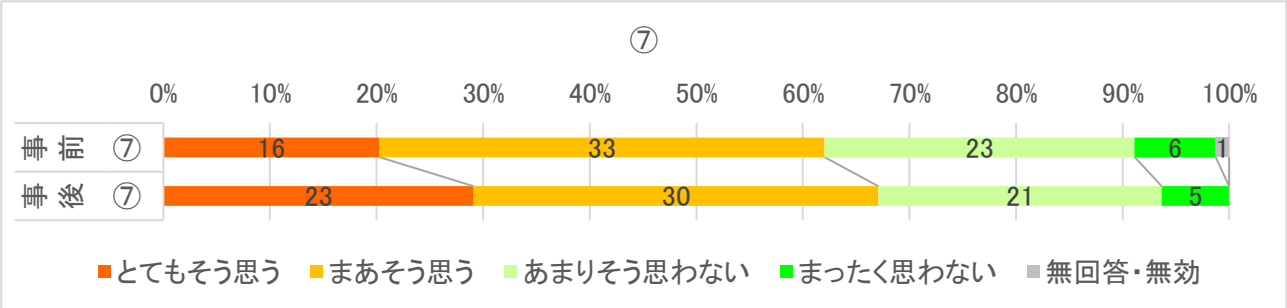

⑤自分の意見を伝えるとき、「相手にわかりやすいよう」工夫して伝えることができる。



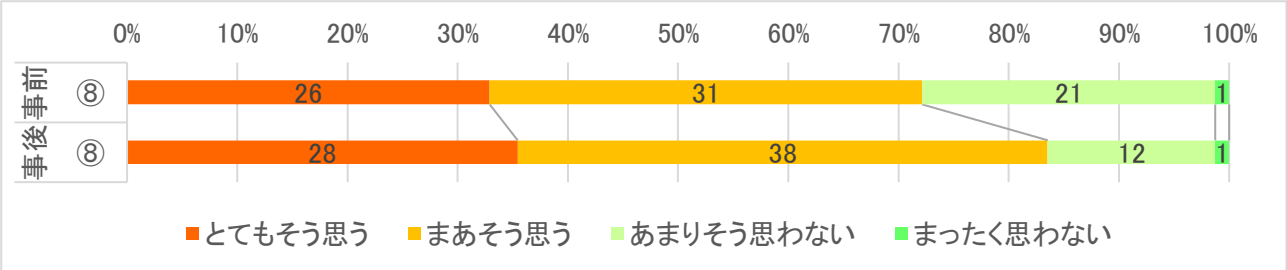

⑥自分の意見を伝えるとき、「なぜそう思うか」といった理由も伝えることができる。



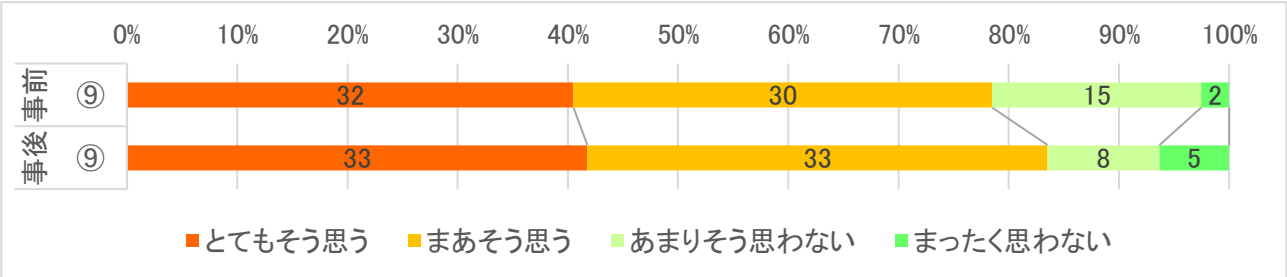
⑦自分の意見を伝えるとき、「どんな資料（本、新聞、インターネットなど）を調べてどんなことがわかったのか（または、だれに聞いてそう思ったのか)」を伝えることができる。



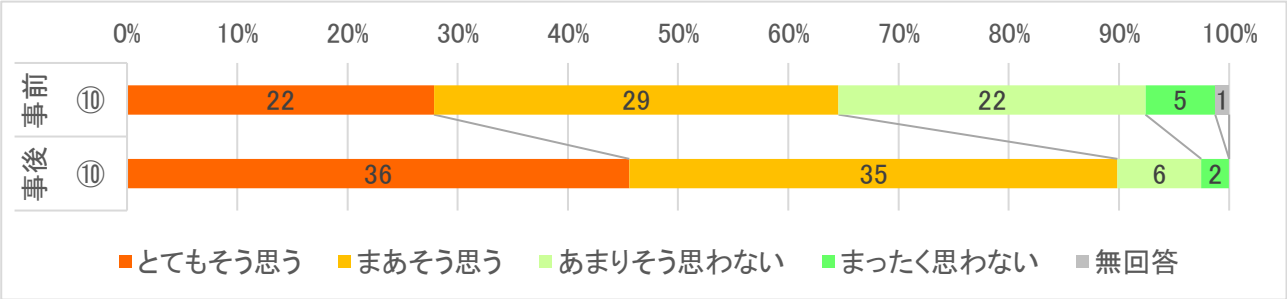

⑧考えたり調べたりしたことを新聞などにまとめるとき、「相手にわかりやすいよう」工夫してまとめることができる。




⑨色々な考えをもつ仲間と話し合い、目標（めあて)に向かって力を合わせることができる。

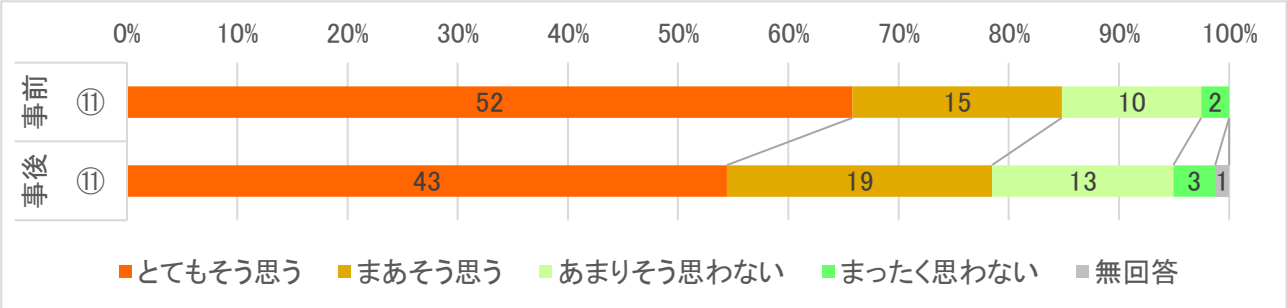



⑩相手にわかりやすいよう工夫して、自分やチームの意見を発表することができる。

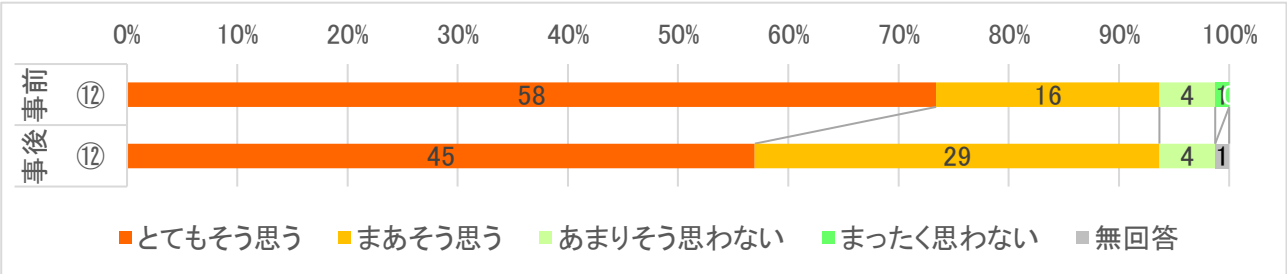


◆Ｑ２．夢・目標・将来について

⑪自分なりの夢や目標(こんなふうになりたい、こんなことができるようになりたい等)をもっている。

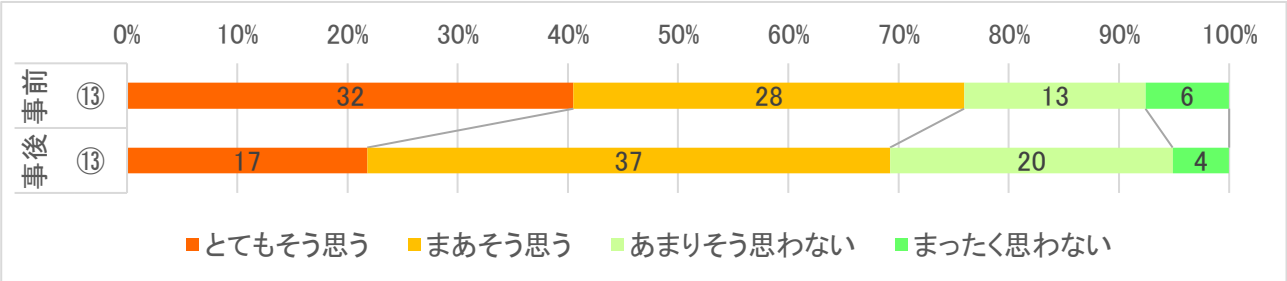



⑫将来(しょうらい)のために、様々なことを知ったり学んだりしたいと思う。

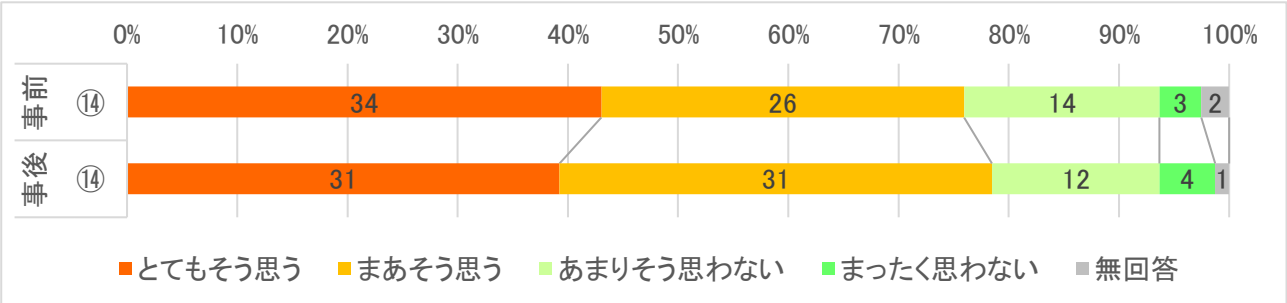



◆Ｑ３．まち・地域について

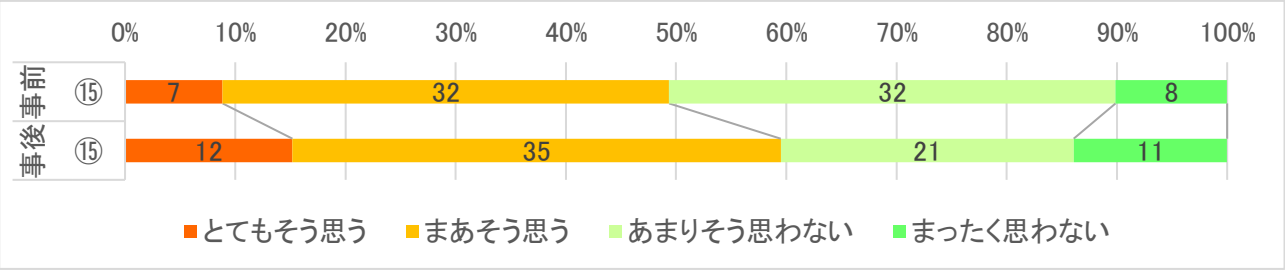
⑬地域の人と話したり交流したりすることがある。



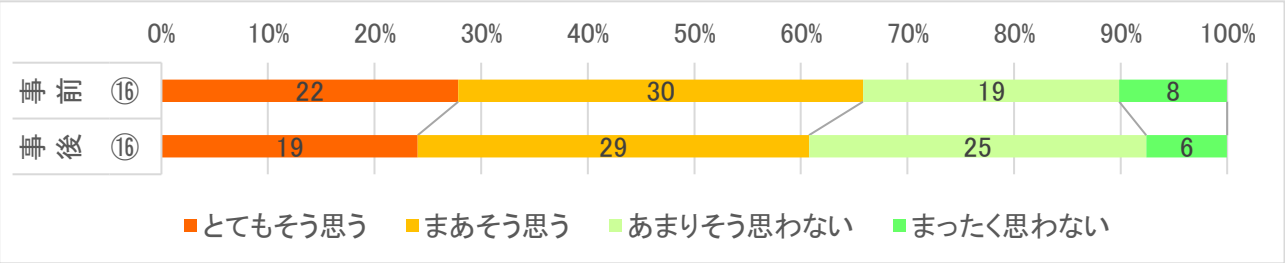

⑭自分たちのために熱心に関わってくれる地域の大人がいる。



⑮まち・地域をよりよくするために、何をすべきか（どんなことをしたらいいか）考えることがある。

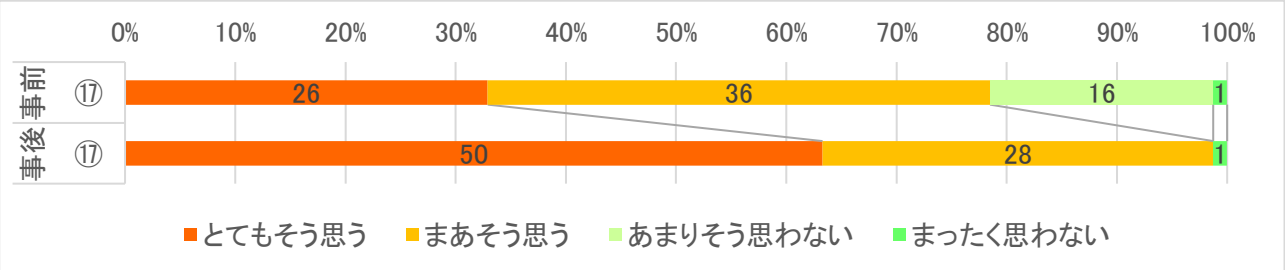



⑯自分自身が行動したり働きかけたりすることで、まち・地域をより良くすることができると思う。

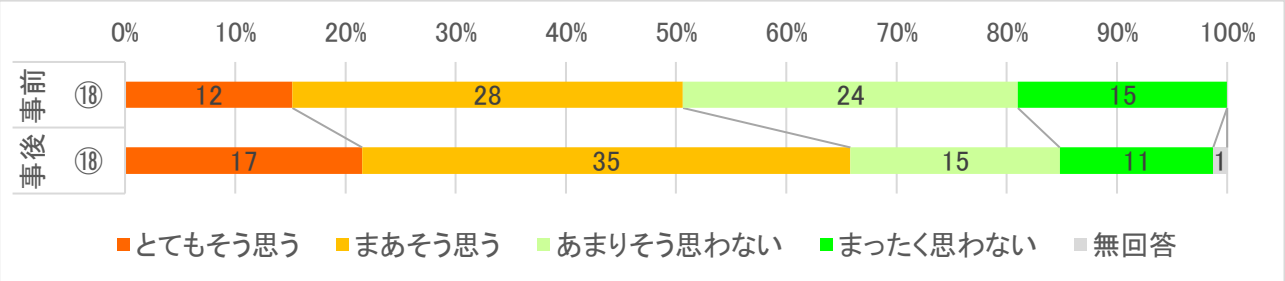



**◆Ｑ５．読み・書き・情報を集めることなどについて**

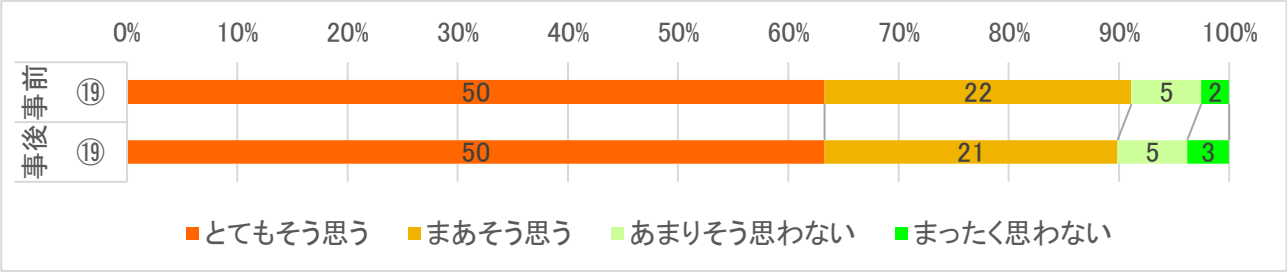
⑰知りたい・調べたいと思うことについて、「本」で調べて、情報を集めることができる。



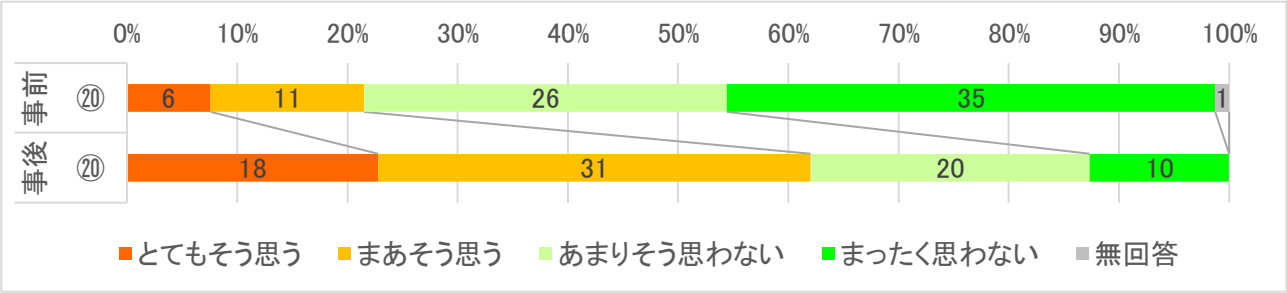

⑱知りたい・調べたいと思うことについて、「新聞」で調べて、情報を集めることができる。



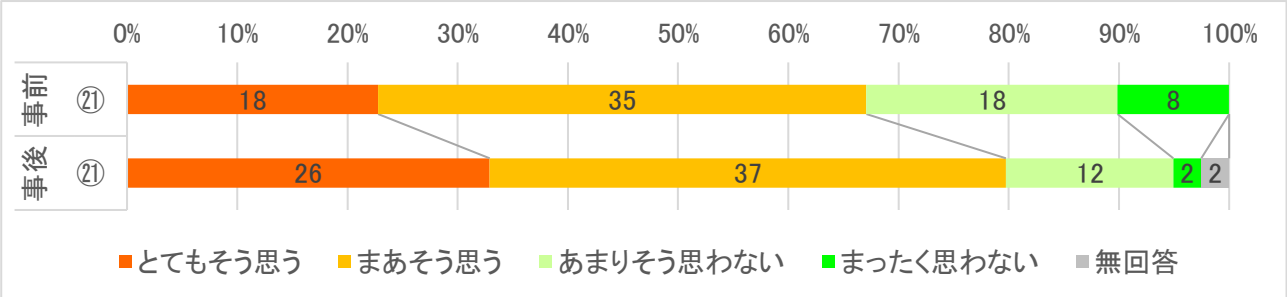
⑲知りたい・調べたいと思うことについて、「インターネット」で調べて、情報を集めることができる。



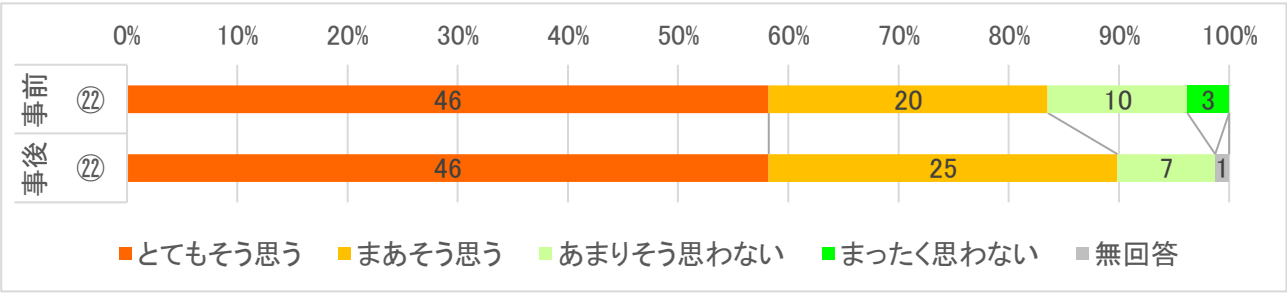

⑳知りたい・調べたいと思うことについて、「そのことを詳しく知っている専門家」にインタビューして、情報を集めることができる。



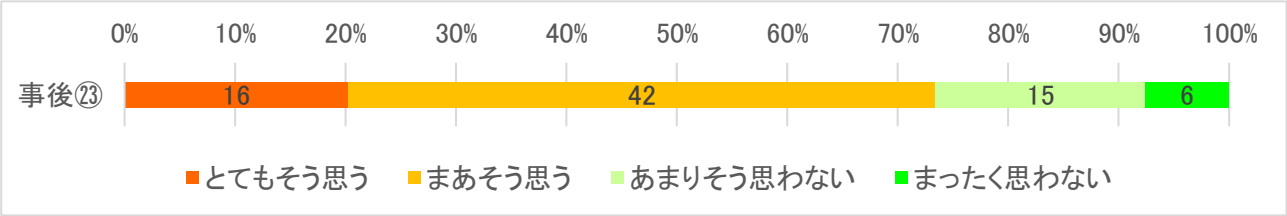

㉑調べたことや考えたことを、伝える相手にわかりやすいように文章などにまとめることができる。




㉒社会をよりよくするために、新聞は役立つと思う。



㉓地域（まち）や社会をよりよくするために、これからも新聞づくりに取り組みたいと思う。




以上、これらの資料を基に、次章以下で、本グループが専門的見地からその分析を行い、実践の成果と課題を記していく。まず、次の３章で、指標①～⑯のシティズンシップの指標について、続く４章では、⑰～㉓の情報活用能力の指標についての分析等をまとめる。

３　シティズンシップ育成の観点からの分析と課題

（１）シティズンシップ育成の指標

2008 年経済産業省は「シティズンシップ教育宣言」において、シティズンシップを「多様な価値観や文化で構成させる社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的（アクティブに）関わろうとする資質」と定義している。そして「一人ひとりが個性を発揮しながら、よりよい社会づくりに関わるために必要な能力を身につけるための教育のあり方」として、シティズンシップ教育の必要性が述べられている。つまり、シティズンシップ教育の目的は、価値観が多様化する社会において、自立し、共生する社会を創る市民を育てることであるといえよう。また、シティズンシップを発揮するために必要な能力として、多様性・多文化の尊重、情報公開制度、多様な職業の存在と内容、企業の社会的責任、ものごとを批判的に見る力、フォロワーシップ、交渉力などの能力を網羅的に分類して示している。

本グループではこれらの知見も参考にして、上に挙げた①～⑯の指標をシティズンシップの指標として設定した。

（２）児童のアンケート結果より

では、児童のアンケート結果を分析したい。「A 自分について」の 3 項目を分析すると、もっともポジティブ回答率の伸びが見られたのは、「①自分の思いや考えを伝えることができる。」（ポジティブ回答比率が 22％増加）。一方で、まったく伸びが見られなかったのは「②むずかしいことがあってもあきらめず、ねばり強く取り組むことができる。」（同様に増加率 0%）。自由記述欄の内容を見ても、「もう少しがんばれたのではないか」などの課題意識に関する記述が多くみられる。不完全燃焼感をもっている児童も一定数いるのではないかと思われる。

「B 相手との関わり、グループ活動について」の 7 項目を分析すると、顕著にポジティブ回答率の伸びが見られたのは、「⑤自分の意見を伝えるとき、相手にわかりやすいよう工夫して伝えることができる。」（同様に 47％増加）と「⑩相手にわかりやすいよう工夫して、自分やチームの意見を発表することができる。」（同様に 39％増加）。やはり、「伝える」こと、特に「相手へのわかりやすさ」への意識については児童自身も伸びを感じていることがわかる。

「C 夢・目標・将来について」の 2 項目とも伸びは見られず、ポジティブ回答比率が減

少している。教員からは今回の実践の後、ふりかえりの時間を充分にとることができなかったと聞いている。学びを自分自身の今後に役立てたり、将来とつなげたりできるような時間を設定できていないことがこのような結果につながった原因と考えられる。今後の課題となるだろう。

「D まち・地域について」の 4 項目中、「⑮まち・地域をよりよくするために、何をすべきか（どんなことをしたらいいか）考えることがある。」だけポジティブ回答比率の伸び（21%）が見られるが、その他の項目には伸びが見られない。シティズンシップ涵養という本グループの目的からすると、本来は、「⑯自分自身が行動したり働きかけたりすることで、まち・地域をより良くすることができると思う。」に伸びを期待したいところだが、むしろポジティブ回答比率は減少している。⑮のように地域をよくするために考えるところまでは行っても、自分自身のまち・地域に対する効力感までの落とし込みまで至っていない児童が多い点は課題と考える。原因として、新聞づくりを目的化してしまったところがあるのではないか。毎回の授業時に何を目的とした活動なのかをしっかり認識させるとともに、ふりかえりで自分と地域・社会とのつながりやこれからの取組みについて考えさせることが重要と考える。

以上を踏まえると、シティズンシップの指標のうち、「相手にわかりやすいよう伝える」ことに関連した指標については他項目と比較しても大きな伸びが見られる一方で、「自分自身の力で地域を変えられる」という効力感の実感までは至っていない様子が見える。「難しいことがあっても粘り強く取り組むことができる」という項目にも伸びが見られず、課題を乗り越えてがんばりきったという実感が充分に持てていないことが要因の一つとして考えられるのではないだろうか。

表４　事後アンケート自由記述欄の分析

| | 記述数<br>（104回答中） | 内訳 |
|---|---|---|
| ①「難しさ・大変さ」に関する記述<br>（例：難しかった、大変だった） | 23 | ＜どんなことに難しさ・大変さを感じたか？＞<br>・新聞をわかりやすくまとめること：18<br>・情報収集・調べること：2<br>・グループワーク：2<br>・発表：2 |
| ②「課題意識」に関する記述<br>（例：もっと～～すればよかった） | 28 | ＜どんなことに課題を感じたか？＞<br>・新聞の中身(わかりやすさ等)：20<br>・新聞づくりのプロセス(調べる等)：3<br>・新聞づくりのプロセス(グループワーク)：1<br>・発表の仕方：3 |
| ③達成感や楽しさ・面白さを感じたという記述<br>（例：～がおもしろかった、～できたからよかった） | 20 | ＜どんなことに面白さ・楽しさ・達成感を感じたか？＞<br>・新聞づくり：2<br>・新しい知識の獲得：9<br>・グループワーク:8 |
| ④「次に向けての前向きなチャレンジ」<br>（例：次は～したい） | 18 | |

さらに、事後アンケートの自由記述欄への記述内容を分析すると、「達成感や楽しさ・面白さ」に関する記述量（20 個）よりも、「難しさ・大変さ」（23 個）や「課題意識（もっとこうすればよかった等)」（28 個）に関する記述量のほうが多いことがわかる（表４）。また、「今後に向けての前向きなチャレンジ」に関する記述量（18 個）も、他項目に比べると少なくなっている。

児童が「難しさ・大変さ」や「課題意識」を何に対して感じたかについて分析すると、「新聞をわかりやすくまとめること」に対して感じた児童数がとびぬけていることがわかる。先述したように教員自身が新聞づくりについての理解が不十分だったと認識していることに加えて、新聞づくりについて専門家からのアドバイスを受ける機会が多くなかったことにより、児童は新聞づくりに迷いや悩みが生じ、「難しさ・大変さ」や「課題意識」の実感が上回る結果になったのではないかと考えられる。

また、児童がつくった新聞に対してフィードバックをもらう機会が発表時の１回だけだったため、課題を知っても改善する機会がなかったことが、「課題意識」の記述量の多さの要因になっている可能性も考えられる。新聞づくりを通してより達成感や面白さを感じられるよう、専門家からアドバイスをもらう機会や、相互フィードバックの時間を拡充させることが課題としてあげられる。また、新聞づくりで「課題意識」を感じていても、「仲間と共に（新聞を）作る過程」に着目している児童については「達成感」の実感値が高い傾向が見られる。これをふまえると、毎回の授業でふりかえりをして、グループワークの改善サイクルをまわす、互いに感謝やフィードバックを伝える機会をつくる等、グループワークの質の向上も同時にめざしていくことが重要と考えられる。

「今後に向けての前向きなチャレンジ」に関する記述量（18 個）が他項目に比べて少ないのは、ふりかえりをして、感じた課題意識や学びを今後につなげるというプロセスがしっかりできていないことが原因とも考えられる。学んだことを自らふりかえり、仲間と共有し、次へのチャレンジを考える機会をつくること。また教員側も、次の学習にどうつなげるのか道筋を示すことが、今後の課題と言えるだろう。

（３）実施結果に対する教員の受け止めと今後の課題

併せて、プログラム終了後に実施校教員へのアンケートも行った。その結果を踏まえると、プログラム終了後に見られた「児童の変容」については、「視野の広がり」「災害に関するニュースへの関心の高まり」「関連する教科学習への関心の高まり（国語の学習内容に防災や地震にまつわることが含まれていると、防災学習で学んだことと結びつける等)」などがあげられていた。新聞づくりを通して、テーマ（地震・防災）に関する関心、そして教科学習への関心まで喚起する効果があったことがうかがえる。また、児童がつくった作品を地域に届けた際、地域の方々から児童に対し「町を一緒に守っていこう」との声がけがあったとのことで、新聞を通して児童が地域へと働きかけた結果、児童が地域・防災に対して持っている思い・熱意に気づき、まちづくりを共に進める協働者として認識するようになったことがわかる。

また、教員が感じた課題としては次の３点があげられた。

１点目は「担任団が、新聞についての理解が不十分で、児童はがんばっているものの、がんばりに見合った新聞ができなかった」と教員自身が述べているように、教員の新聞に対する理解度が児童の新聞づくりの出来に影響したと考えられること。

２点目は、「新聞づくりがメインなのか、防災学習がメインなのか、担任自身も子ども達もねらいが不明確なまま進めてしまった」とあるように、ねらいの比重について教員間での検討が不充分だったと認識されていること。

3 点目は、教員が「たくさんの専門家」による「多方面に渡るサポート」に感謝する一方で、「それぞれの方のねらいをよく把握できていなくて、せっかく来て頂いているのにうまく対応できなかった。結果的に担任も子どもも混乱があった。」と、専門家の効果的な活用ができなかったと認識されている点である。

本グループメンバーが教員に口頭で感想を聞いた際にも、「教員側で、事前にプログラム内容について詳細イメージできていなかった部分があり、後から『この講師にはこのような内容の話や関わりをしてほしかった』など、改善点が見えてきた。」という声もあった。

上記の課題の原因の一つとして、プログラム構想段階で、プログラム内容やねらいに関して、教員間そして担任団と専門家グループ（本グループ）との間で検討・共有する時間が充分にとれなかったことが考えられる。また、本グループと担任団との間の連絡調整を行ったメンバー（角野）が、専門家それぞれの専門性やサポートできる内容のイメージを充分に伝えきれなかったことも反省を込めた課題としてあげたい。2018 年度の実践時とは異なり、教員主体でのプログラムの場合、まず教員自身が目的や内容、専門家の活用イメージをしっかり持つこと、そして専門家グループも教員のねらいをしっかりと受け止め、どのようなサポートを行うのか充分に調整した上で参画することが重要と考える。

## ４　情報活用能力育成の観点からの分析と課題

### （１）　学習指導要領に明示された「情報活用能力」

平成２９年３月に公示された学習指導要領においては、「教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」として、「情報活用能力」が重視されている。

また、新しい学習指導要領の基礎資料となった、「２０２０年代に向けた教育の情報化に関する懇談会　最終まとめ」（平成２８年７月２８日）には、次世代に求められる「情報活用能力」の育成について、次のように記されている。（引用中の下線は論者が添えた。以下同様）

> これからの社会を生きる子供たちに、情報を単に受け止めるだけでなく、整理・分析し、まとめ・表現し、他者との協働で思考を深めたりして、<u>物事を多角的・多面的に吟味し見定め、主体的に新たな価値を生み出す力を育む</u>とともに、情報モラルを身に付け、情報社会に主体的に参画し創造していこうとする態度を育んでいくことが期待される。

「物事を多角的・多面的に吟味し見定め、主体的に新たな価値を生み出す力を育む」と述べているように、情報活用能力の育成においては、情報を主体的に選択し、自分なりに評価することにより、自分にとって意味のある知見とは何なのかを自覚していくことが求められている。自立し共生する社会を創る市民となるためには、情報を受け止めることだけにとどまらず、情報から得られた知見をより主体的に活用し、自らの考えを形成したり発信したりしていくことが重要になる。

### ⑵ 学習指導要領における新聞の活用

さらに、学習指導要領において、「情報活用能力」は、より社会的実践力としての「情報活用能力」として求められているため、総則編に新聞を学習材として活用することが例示されている。「小学校学習指導要領解説総則編」（平成 29 年 6 月）には、次のように示されている。

各教科等の指導に当たっては、教師がこれらの情報手段のほか、各種の統計資料や新聞、視聴覚教材や情報機器などの教材・教具の適切な活用を図ることも必要である。各教科等における指導が、児童の主体的・対話的で深い学びへとつながっていくようにするためには、必要な資料の選択が重要であり、とりわけ信頼性が高い情報や整理されている情報、正確な読み取りが必要な情報などを授業に活用していくことが必要であることから、今回の改訂において、各種の統計資料と新聞を特に例示している。

つまり、「信頼性が高い情報や整理されている情報、正確な読み取りが必要な情報」として新聞が認められているのである。特に、「正確な読み取りが必要な情報」とあるように、新聞は、同じ出来事を報道するにも各新聞社によって違いがある。したがって、正確な読み取りをするためには、新聞を比較検討していくことが必要になる。このことを通して、情報とは主観的・恣意的なものであることを学び、ものごとを批判的に見る力を育み、情報を見極めて取捨選択しながら活用することにつながるであろう。

小学校学習指導要領　国語では、次のような事項を身に付けることができるように指導することが示されている。

| | 第1学年及び第2学年 | 第3学年及び第4学年 | 第5学年及び第6学年 |
|---|---|---|---|
| 情報と情報との関係 | ア　共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。 | ア　考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報の関係について理解すること。 | ア　原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。 |
| 情報の整理 | | イ　比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使うこと。 | イ　情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。 |

また、国語科は、言語活動を通して資質・能力を育成することを教科目標として掲げている。よって、情報の扱い方に関する事項も言語活動を通して育成するものと捉えることができる。「情報の扱い方」を単独で考えるのではなく、思考力、判断力、表現力の各事項と関連づけて、言語活動を通してどのような資質・能力を子どもに身に付けさせたいか明確化することが必要である。

言語活動においては、子どもが目的や必要性を感じられる課題を設定することがまず求められる。今回は「『地震が起こっても安心なまち』をつくるには」というテーマを設定して新聞づくりに取り組んだ。2018年（平成30年）6月18日7時58分39秒に、日本の大阪府北部を震源として発生した地震において、高槻市では最大震度6弱を観測した。地震を経験した子どもたちにとっては、自分事として考えることができるテーマである。

関連図書や新聞記事を用いて調べて得た情報について、自分自身で思考判断し、表現してすることを通して「情報の扱い方」が生きた力として身につくであろう。以上のことを踏まえて、新聞作りに取り組ませ、育成すべき指標として、⑰～㉓の7項目を「情報活用能力」と規定し、分析することにした。以下、4視点より分析する。

（２）　情報活用能力の観点からの分析

① 児童のアンケート結果より

⑰~㉓の 7 項目の中で「⑰知りたい・調べたいと思うことについて、「本」で調べて、情報を集めることができる。」のポジティブ回答比率に大きな伸び（増加率 22%）が見られる。これは、本グループのメンバーが、学校の図書室にはないたくさんの図書を準備し、その活用方法をレクチャーした効果が出ているのではないか。また、「⑳知りたい・調べたいと思うことについて、「そのことを詳しく知っている専門家」にインタビューして、情報を集めることができる。」のポジティブ回答率の大きな伸び（増加率 188%）には、本グループだけでなく市役所の専門家や防災の専門家など多くの専門家が関わった影響が出ていると思われる。情報活用能力のうち、「本」や「新聞」、「専門家へのインタビュー」を活用した項目に伸びが見られるのも、本グループが参画した効果があらわれていると考えられる。

② 情報活用のための図書館活用の観点より

子どもたちが作成した新聞の記事の内容は、2 章で示した図書等を調べて、情報を取捨選択し、わかりやすくまとめている。図、表、イラストなども使って読みやすくしていることがうかがえる。ただ、限られた紙面であるため、網羅的になっている傾向が見られる。何を取り上げるのか、ポイントを絞って、そのことについて多様な角度から提案できるようになるとより考えが深まるであろう。以下、どのような本を借りて、新聞づくりの参考にしたのか細かくみてみよう。

2018 年６月に大阪北部地震を経験した５年生にとって地震は自分事になっている。その状況の上で自然災害、特に地震の起こるメカニズム・過程・システムを知ろうと、７冊を参考にしている。

自然災害について７冊

| | |
|---|---|
| ５　「巨大地震なぜ起こる」 | １２「知ってそなえよう！地震と津波」 |
| １５「自然災害・地震の災害」 | １８「日本災害写真・絵画集２地震・津波」 |
| ２３「日本の地震地図決定版」 | ３１「震度７」 |
| ３４「巨大津波の記録　明治・昭和・平成」 | |

次に、シティズンシップの観点から、自然に湧いてきたと思われる安全対策の本(26 冊)に目が向けられている。作成した新聞記事からは、❶どこが危ないのか　❷起こる前の備え　❸起こったその時の行動・問題点　❹その後の行動の記載がある。活用された書籍番号は、１、２、３、４、６、７、８、９、１０、１１、１３、１４、１６、１７、１９、２０、２１、２２、２５、２６、２７、２８、２９、３０、３２、３３であった。

さらに、その他１冊として、２４「宮城県気仙沼発！ファイト新聞」があげられる。この本は、３・11 東日本大震災の折、被災地で被災数日後から小・中・高校生が実際に作った新聞をまとめた内容になっていることから、自分たちの新聞作成に何等かの影響はあると推察する。実践を進めていくうちに、新聞のつくり方の参考となるため、６２「新聞を作ってみよう！」を追加した。また、もっと具体的で高度な内容をリクエストした児童のために 22「自治体・事業者のための防災計画作成・運用ハンドブック」23「日本の地震地図決定版」の２冊を追加した。加えて、家庭で見つけた市内個別配布のパンフレットも活用して、新聞作成の記事とした児童もいた。特筆すべきは１人で２２冊を借りている児童もいたことである。

③　児童が作成した新聞の分析

作成された新聞を内容面と表記面で、８つの観点を設定し、表５のように評価した。それぞれの観点については、以下の通りである。

内容面は、

A シティズンシップ

本研究のテーマでもあり、児童に身につけさせたい資質・能力であるので、強調したい部分である。地域との関連や地域に対する発信意識が読み取れるかどうかで判断した。

B 引用

調べ学習の結果として資料からの引用がされているが､出典が明記されているかどうか、それに自分の考えが表現されているかどうかで判断した。

C 相手意識

誰に対して発信しているのかがわかるような表現になっているかを読み取った。国語科の表現として必須の条件である。

D 目的意識

相手意識と同じように、発信者として何をどのように伝えようとするかは大切である。新聞を読んで何を考えて欲しいのかも伝えたい。

E レイアウト

読みやすさと伝わりやすさ、作文における文章構成としてどこに何を配置するのかは必要なことである。

F 題名

③④と関連することではあるが、誰に、何を伝えたいのかということをコンパクトにまとめたものになっているかで判断した。

G 見出し

伝えたいことのまとまりを考えて発信しているかがわかるものである。新聞の特徴として必要な事柄であると思う。

H 後書き(編集後記)

新聞を作成した結果を振り返ったり、相手に対して再度まとめとして伝えたりする項目である。ここが感想にならず、地域に目を向けているかどうかが重要である。

表５　完成新聞　評価一覧表（◎➡○➡△➡×）

| | A | B | C | D | E | F | G | H | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| １－１ | △ | ○ | ◎ | ◎ | △ | ○ | ○ | × | 調べたことをまとめることに意識がある。 |
| １－２ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | × | 引用先が明記されていない。 |
| １－３ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | × | 実際の状況をシミュレーションできている。 |
| １－４ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | × | 自分たちの住む大阪府の位置を示している。 |
| １－５ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ○ | ○ | 後書きに自分たちの学習のまとめが書かれている。 |
| １－６ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | △ | ○ | ○ | 後書きに防災の大切さを書いている。 |
| １－７ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | × | 南海トラフの内容に高槻の震度予想を書いている。 |
| ２－１ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | × | 絵や図を多く引用し、見やすくしている。 |
| ２－２ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | △ | ◎ | × | 題名の意味が伝わらない。 |
| ２－３ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | × | 色使いやレイアウトなど読みやすさは意識している。 |
| ２－４ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | △ | 日吉小学校のことを書いている。後書きが感想。 |
| ２－５ | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | × | 縦書きと横書きが混じっている。 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2－6 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | × | 調べたことをまとめている。自分の考えが欲しい。 |
| 2－7 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | × | 調べたことをまとめている。自分の考えが欲しい。 |
| 3－1 | △ | ○ | ◎ | ◎ | △ | ○ | △ | △ | 後書きに相手意識は書かれているが漠然としている。 |
| 3－2 | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | △ | 南海トラフと北部地震の比較。後書きが惜しい。 |
| 3－3 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | △ | × | 色使いを意識し過ぎて読みにくい。イラストに意識。 |
| 3－4 | △ | ○ | ◎ | ◎ | △ | ○ | ○ | △ | 色を使っているので見出しが消えている。 |
| 3－5 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | × | クイズに意識がいっている。 |
| 3－6 | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | × | 高槻市危機管理室に質問している。 |
| 3－7 | △ | ○ | ◎ | ◎ | △ | ○ | ○ | ○ | 編集後記がまとめで終わっている。 |
| 4－1 | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | 高槻の防災について触れている。 |
| 4－2 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | × | 見出しなど問いかけによって相手意識が窺われる。 |
| 4－3 | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | 編集後記に自分の地域のことを書いている。 |
| 4－4 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ◎ | 編集後記を複数に分けて書いている。 |
| 4－5 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | 編集後記を自分に引き付けて書いている。 |
| 4－6 | △ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | 編集後記が形式的なまとめになっている。 |
| 4－7 | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | 編集後記がこれからの活動を想定している。 |

表５の一覧表を作成したうえで、新聞が発信するツールとしてどのような働きをしたのか、以下の３点について考察を試みた。

**１　自分の考えを構成するツールとして**

調べたことをまとめるという意識は強い。国語科の指導は行き届いている。

引用はしているが、どこからの引用かが明記されていない。

グループでまとめているので、それぞれの考えが見えにくい。記事の下に筆者名を明記する。

**２　発信者意識を形成するツールとして**

防災意識を伝えようとする意識は強い。

後書きの指導はクラスでの指導による。４組が意識的に書いている。

**３　地域を観る資質・能力を育成するツールとして**

自分たちの街に目を向けているものが少ない。

後書きに内容のまとめではなく、地域に目を向けた新聞づくりをした経験を書けるようになるとより良い。

④ ジャーナリズム精神の観点より

新聞形式の取り扱いについては、専門家から児童・教員に対して、十分に指導する時間が不足した感は否めない。その中で⑰⑱⑳㉑のように事後の数値が伸びたことは、児童の達成感や肯定感情の伸びに由来するのではないだろうか。情報を集めることに自信を感じられた結果は、情報の取捨選択に適切な能力を高められたと、児童が実感したことの表れと受け取れる。しかしながら、新聞形式で情報を整理する編集作業では、多くの課題が見られる。どうしても「情報のまとめ」で終わってしまい、伝えようとする内容のリードにあたる部分がほとんど欠落していた。わずかでも記述が見られたのは２８作品中、４作品ほど。字数や面積の制限はあっても、新聞発行について狙いや目的の記載がないため、紙面では調べた情報の列挙になったと感じられた。

情報の掘り下げ方も、不十分だった。資料で調べたことを自分ごとに落とし込むために、自分たちの周辺で確認する作業がほとんど見られなかった。あるグループでは、避難時の持ち出し品に公衆電話用の 10 円硬貨を挙げたものの近隣の設置場所を確認しておらず、発表会で保護者から「どこで公衆電話を使えるか」との問いに答えられない場面があった。

インタビューや調べを、届ける読者の生活圏に当てはめて実用性を高めるのは、児童が自らの市民意識を高めることにも通じる。授業ではフィールドワークにかける時間はなかったかも知れないが、あらかじめ意識させる指導があれば、登下校の途中でも手がけられたものと、反省する。

新聞作りを通じて、「どこの」「だれに」「何を」届けるのか。メディアに求められる役割を自ら考えることで、シティズンシップを意識させる取り組みが深まり、結果、⑰～㉓の各内容での改善が見込めると考える。

## 5　本グループの今後の展望

以上、2 年次の取り組みの成果と課題を明らかにしてきた。最後に、この 2 年間の実践を踏まえ、本グループの今後の展望を示しておきたい。

まず、第一に、本研究が、今後の NIE 研究の発展に寄与するためにも児童の様々な伸長の成果検証をより精緻に進めていく必要があると考えている。なかでも、今回提案した 23 の指標の再検討も必要であろう。さらに、児童がどのような悩みや仲間との対話を経て、新聞を完成させたのか、情報活用能力の進展の分析も兼ね、作業途中のポートフォリオ等の把握も必須である。それらの点も含め、実践学校の教員との理念の共有や打ち合わせの重大性も痛感している。

しかし、最大の課題は、新聞そのものの質の向上であることは言うまでもない。単に調べたこと、聞いたことをまとめるものでなく、ジャーナリズム精神にあふれ、取材対象そのものも批判的に検討し、論陣を張る場合があってもよい。そのような新聞づくりへと児童をいざなう、私たちと児童のかかわりをどう進めていくか、その手法が問われている。私たちのグループのめざすところは、大阪の地で、自分たちの考えや想いを社会に伝えたいと願う子どものためのメディアを創設することであるが、この 2 年の経験から、学校現場を足場に、現場の先生方の協力のもと、子どもたちと新聞づくりをすすめることが、一定のレベルにある新聞をつくるために、まず必要だとも実感している。

そこで、3 年次は、この 2 年の取り組みを受け、発展的にこの取り組みを継承しようと考えてくれる学校と新たな実践を進めているところである。本グループは、その結果を受け、子どもメディアづくりの方向性をさらに検討していきたい。来る 2021 年の第 18 回日本 NIE 学会大会にその成果を発表することをお約束して、本稿を閉じたい。

注

1)「シティズンシップを育てる「子ども新聞」づくりの挑戦－専門家グループによる小学生との課外活動－」『日本ＮＩＥ学会誌』第 15 号　41～50 頁　　2020 年 3 月、　日本ＮＩＥ学会第 16 回大会(鳴門教育大学　2019 年 10 月 19～20 日）研究委員会分科会 シンポジウム「ＮＩＥ実践と研究のブレイクスルー」□□ケーススタディ「実践者と研究者との連携のあり方は？　～2018 年シティズンシップ・チャレンジ　プロジェクトの経験から」や自由研究発表「シティズンシップの育成をめざした『子ども新聞』づくり～ 専門家（ＮＩＥ学会員）と小学校との協働を模索して」

用紙はＡ４判、上下左右マージン（余白）各 20 ミリ。
フォントは 10.5
PDF ファイルにて提出してください。

**提出〆切：2020 年 10 月 31 日土曜日［必着］**